

	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
7月	1,025	758	989	84	5	2,861	1,195	36	217	159	120	921	5,509
累計	4,406	3,012	3,180	674	30	11,302	4,477	182	855	786	460	4,082	22,144

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

## 📄 今月のレファレンス記録票から

分類

質問と内容

C10/S2 昭和初期、市川駅近辺にあった「東華園」についての資料を探している。

「俯瞰図から読み解く市川」(<https://smtrc.jp/town-archives/city/ichikawa/p07.html>)  
2019.12.13 確認) というサイトから、『松井天山 千葉県市川町鳥瞰図』(聚海書林 1989) に「東華園事務所」とあり、京成電気軌道(現京成電鉄)や初代社長の本多貞次郎と関連が深い施設であることがわかる。『松井天山 千葉県市川町鳥瞰図 解説書』の「東葛飾郡市川町昭和三年」(鈴木恒男/解説)には、国府台高等女学校(現国府台女子学院)の開設事務所が「京成の経営する遊園地東華園」に置かれ、第一回入学式もそこで行ったとある(p.12)。

『京成電鉄五十五年史』(京成電鉄 1967)に、大正8年には、東華園の直営を行っており、約3,900坪の敷地をもつ庭園で、果樹などが多数植えられ、「春秋の行楽期は近郊唯一の名園として親しまれて」(p.197)いたとある。また、同園で創立10周年記念祝賀園遊会が開催されたとあり、『京成電鉄85年の歩み』(京成電鉄 1996)には、祝賀会の記事や当時の東華園の図版が掲載されている(p.34)。また、五十五年史 p.210-212には、同園内に本多貞次郎寿像が建てられたが、その後、太平洋戦争中の金属供出で撤去されたことや、跡地は市川の発展とともに分譲され、住宅地になったことが記載されている。

『たくみぼり彙報 私の市川學 第4巻 村から町へ』(鈴木恒男/著 増訂追補 1994)には、「京成の東華園」等(p.83-88, p.151-153)、出典も含めた詳しい情報があり、『千葉県東葛飾郡誌』([崙書房] [1970]) p.1251、『市川市勢総攬』(市川市勢調査会 1934) p.245にも記述があることがわかる。

ほかに、『月刊いちかわ』2014.7月号(エピック)の「天山絵図ぶらり散歩 29」(笹川伸三郎/文)に、「東華園」が取り上げられている(p.36)。

Z/け 林芙美子の荷風訪問に関する記述を探している。市川市立図書館のホームページで記事を見たので詳細を知りたい。

「地域情報 荷風をめぐる人々 その3」と題して、「荷風を訪れた著名人は語る」というページがあり、その中で「林芙美子」を紹介している。

(<http://www.city.ichikawa.lg.jp/library/db/1054.html>)

『林芙美子の昭和』(川本三郎/著 新書館 2003)には、索引があり、永井荷風の関連記述を探ることができる。その中に「意外や林芙美子は永井荷風の読者だったのであり、戦後は荷風本人にも会うことになる。」(p.77)、「この庶民的な作家が意外なことに、高踏的な永井荷風を尊敬していたことである。作品のなかでしばしば荷風の作品に触れているし、戦後、市川に住む荷風に会いに出かけてもいる。」(p.394)とある。

『断腸亭日乗 第7巻』(永井荷風/著 岩波書店 新版 2002)の人名索引「林芙美子(昭23)9・23」から『断腸亭日乗 第6巻』の9月23日の部分を見ると「閨秀作家林芙美子来話」(p.274)とある。

林芙美子自身の記述としては、『荷風全集 第25巻 附録』(中央公論社 1948)に「荷風文学」(p.93-94)があり、「先日、荷風先生にお眼にかゝった時(後略)」という部分がある。

『和田芳恵全集 第5巻 随筆』(和田芳恵／著 河出書房新社 1979)には、「永井荷風」(p.175-194)の中に、「林芙美子が、ぜひ、荷風にあわせてといった。(後略)」(p.191)という記述がある(初出:『太陽』1971年6月 特集:永井荷風 平凡社)。

『荷風外伝』(秋庭太郎／著 春陽堂 1979) p.360には、「林を荷風に紹介したのは朝日新聞社である。」と書かれている。

## 291 葛飾が武蔵国に編入された時期や境界について知りたい。

『角川日本地名大辞典 13 東京都』(角川書店 1978)の「葛飾区」の沿革「古代」には、「律令制下では下総国葛西郡に属し、武蔵・下総両国は隅田川を境に分かれていた。」(p.819)とある。

『日本歴史地名大系 13 東京都の地名』(平凡社 2002)の「葛飾区」の項には、「江戸時代初頭までは下総国葛飾郡に属したが、寛永(1624-44)頃に葛飾郡は二分され、武蔵国葛飾郡となって幕末に至った。」(p.930)とある。また、同書のp.931には、「寛永6年の奥戸新田の八剣神社棟札には「下総国葛西庄」、(中略)同18年の奥戸天祖神社棟札には「武州葛西奥戸村」とあり、下総国葛飾郡から分れて武蔵国葛飾郡が成立した時期が推測できる。」とある。

『房総文化 第2号』(房総文化研究会 1959)には、「下総と武蔵との国境について」(村崎勇 p.1-8)という論文があり、隅田川の左岸が葛飾郡に属するとある。

『葛飾区史 上巻』(東京都葛飾区 増補 1985)には、「第10章 行政区画の変遷」があるが、p.1054には、「武蔵国と下総国との境界については古くから学者の間で論議され、また多くの文献にも載っているが、いずれも大同小異である。」とあり、参考資料が紹介されている。「第2節 武蔵国所属のころ」(p.1056)には、「正保元年(1644)以降全く武蔵国管下に移された。」と記載されている。

## 450 K-T境界とは何か。

『オックスフォード地球科学辞典』(朝倉書店 2004)に「K/T境界事件」(p.175)という項目があり、およそ6,500万年前にユカタン半島に小惑星が衝突した事件で、白亜紀末の大量絶滅の原因とする見解が、完全に受け入れられているわけではないが、大勢を占めていると記述されている。

『「地球科学」入門』(谷合稔／著 ソフトバンククリエイティブ 2012)の「巨大隕石の衝突」(p.108-110)や、『生命の惑星』(チャールズ・H.ラングミュアー、ウォリー・ブロッカー／著 宗林由樹／訳 京都大学学術出版会 2014)の「白亜紀-第三紀境界の絶滅」(p.506-510)の中にもK-T境界に関する記述がある。

『全地球史解説』(東京大学出版会 2002) p.452には、「詳細な化石記録が残されている顕生代において、(中略)大量絶滅と呼べる大きな事件は、少なくとも5回起きたことがわかっている。(中略)約4.5億年前(オルドビス紀末)、約3.5億年前(デボン紀末)、約2.5億年前(P-T境界)、2億年前(三疊紀末)そして0.65億年前(K-T境界)の5回の事件である」とあり、p.454には、「K-T境界については、1980年以降急速に研究が進み、巨大天体の落下・衝突によって起きたことが証拠付けられた」とあり、「6.6白亜紀・第三紀境界の大量絶滅」(p.483-488)に詳細な記述がある。

## 他にもこんな質問ありました (クイック・レファレンスから)

分類	質問	⇒ 回答、補足事項、濫著など
185.0	自分の宗派の寺がどこにあるのか調べられる本はあるか。	⇒ 『全国寺院大鑑』(法蔵館 1991)に、市町村別の寺院名簿があり、宗派も記載されている。
337.8	昭和の金の相場が知りたい。	⇒ 『物価の文化史事典 明治/大正/昭和/平成』(展望社 2008) p.410-411、『値段史年表 明治・大正・昭和』(朝日新聞社 1988) p.50に記述がある。
911.56	室生犀星の詩、「神国童謡」が読みたい。『餘花』という詩集に入っているらしい。	⇒ 『余花』(室生犀星／著 昭南書房 1944)が、国立国会図書館デジタルコレクション(インターネット公開)で閲覧可能。p.66-67(43コマ)が「神国童謡」となっている。